物語を読んで考えを深めよう　（教科書　光村六年）

海の命

立松　和平

第一次指導（概観の指導）一時間

目標

太一の生活を通して「いのち」と村一番の漁師であり続けられたことの意味を考え、自分の生き方を振り返ることができる。

○　準備（教材と鉛筆一本　ノート）

〈区画〉１（p190の一行目　父もその上に１）
２（p192の八行目　中学校の上に２）
３（p194の五行目　弟子にの上に３）
４（p196の二行目　ある日の上に４）
５（p198の七行目　追い求の上に５）
６（p199の七行目　興奮しの上に６）
７（p200の二行目　もう一の上に７）
８（p201の五行目　やがての上に８）
絵にも番号１～７まで、８は絵なし

一　よむ（音読　区画一名ずつ　計八名）

二　とく（読後感整理の話し合い）

○　**題目**（教材の輪郭を確認する）
・「海の命」は誰から出た言葉か。→太一
・太一→主人公→職業→意識したのは

◎　**ひびき**（この文章で印象に残ったこと）
・太一の描かれている絵を読む。
　五枚の中で一枚だけ違う絵
　（人物の確認　太一の年齢）
　太一の表情が分かる絵
　（絵から受けるイメージ）
・太一が村一番の漁師でありつづけた話

○　**手引き**（視写の指示）
・太一を表す一言を文中から書き出す。
　（絵を参考に　立場や心情等から）

三　よむ（手引きに従い黙読）

四　かく（視写　教師も板書）略

五　よむ（代表　一名　板書を音読）

六　とく（板書を手がかりに話し合う）

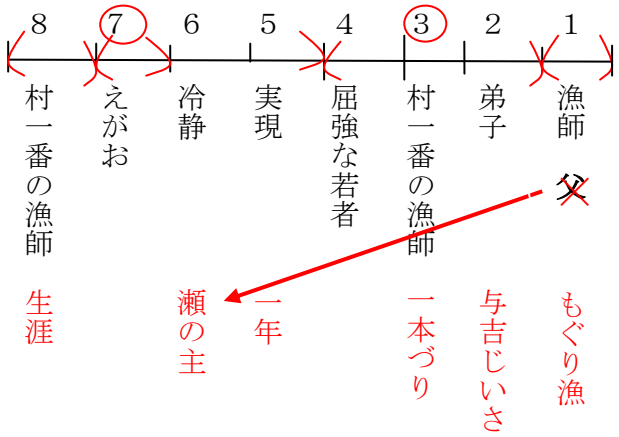
○　**事実**（書かれた言葉の関連付け）・**区分**
・村一番の漁師と認めたのは誰か。
・太一の追い求めていたものは何か。
・その準備ができたのは。
・父の仇を討ったのか。
・太一が守ったものは何であったか。
〈区分〉２～７を二区分後、
　５～７を二区分

◎　**山**（文章の山の発見）
・　太一が村一番の漁師でありつづけたもとが書かれている二か所を決める。
・　二時間でそこを詳しく読みましょう。

○　**余韻**（太一の生き方を詳しく考えてみよう…）

七　よむ（全員で黒板を音読）

〈板書事項〉



第二次指導　第一時（1／2）

一　よむ（音読　八名）

二　とく（本時の足場作りの話し合い）

○　おさらい（前時六とくの復習）

・太一の子ども時代と結婚後の話。
（もぐり漁師の父　一本釣漁師の太一）

・太一が瀬の主と出会った日の話。
（夢の実現　冷静な太一　表情の変化）

◎　承接（本時へつなぐ）

・瀬の主に出会った太一はどんな人物
（屈強な若者　与吉仕込みの漁師）

・与吉じいさの漁場はどこか。

○　手引き（視写の指示）

・太一が与吉じいさから免許皆伝を伝えられたのは何番か。3の「」の中とその前の一文を書き出す。

三　よむ（手引きに従い黙読）

四　かく（視写　教師は、板書）
略　板書事項を参照

五　よむ（次の番　板書を見ながら音読
他は板書を見る）

六　とく（板書をもとにして話し合う）

○　語義（難語句の解消）・区分

・　そのころ　こそきたが　なっていた
ここは　すべてをさとる　海に帰る
おかげさまで　海で生きられる

〈区分〉それぞれを二つに区分

◎　心（文章の核心をつかむ）

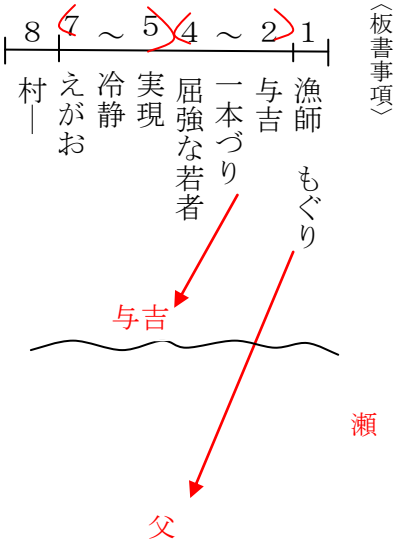
・一本釣りの免許皆伝した太一。
（それが、分かる。
技術面と精神面を具体的な文で
確認すると四つある。）

・与吉じいさの死をどう受け止めたか。

○　余韻（与吉と太一の師弟は素敵だな）

七　よむ（全員で黒板を音読）

〈板書事項〉



そのころには、与吉じいさは船に乗ってこそきたが、①作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番②の漁師だよ。太一、ここは③おまえの海だ。」

太一はすべてをさとった。

「海に帰りましたか。」与吉じいさ、心から感謝しております。④おかげさまでぼくも海で生きられます。」

第二次指導　第二時（２／２）

一　よむ（音読　八名）

二　とく（本時の足場作りの話し合い）

○　おさらい（前時六とくの復習）
・太一が与吉じいさに教えられたこと。
（村一番の漁師　ここはおまえの海だ）
・太一は与吉じいさの生き方も学んだ。
（千匹に一匹　海で生きていける）

◎　承接（本時へつなぐ）
・太一の漁と漁を済ませた太一。
（二十匹　父の海）
・屈強な若者に育った太一の姿を見る母の目。
（心の中　恐ろしくて夜も…）
・太一の心の中
（母の悲しみを背負おうとしていた）
・母の心配は現実とはならなかった。

○　手引き（視写の指示）
・太一が瀬の主を見た三回は、何番か。
七番の最初段落を全文視写し、「」の部分を書き加える。

三　よむ（手引きに従い黙読）

四　かく（視写　教師は、板書）
略　板書事項を参照

五　よむ（次の番　板書を見ながら音読
他は板書を見る）

六　とく（板書をもとにして話し合う）

○　語義（難語句の解消）・区分
・おだやかな　たがっている　のだ
数限りなく　こんな　ここに　おられた
〈区分〉見たことと思ったことに二区分
思ったことを「」にする。

◎　心（文章の核心をつかむ）
・太一が、笑顔になれたのは、何と何が結びついたからか。
・父と思えたのは、主のどんな姿か。
（全く動こうとはしない
見ていた　おだやかな目）
・太一の思いが、④のように思える転機は何番の思いか。
（③ → ②こんな感情　初めて）

○　余韻（太一の大魚に海の命を感じたのだな）

七　よむ（全員で黒板を音読）

〈板書事項〉

おまえの海　　千匹：一匹
父の海　　母

海へ帰る

もう一度もどってきても、
瀬の主は全く動こうとは
せずに太一を見ていた。①
おだやかな目だった。「この
大魚は自分に殺されたがって
いるのだ」と、太一は思った
ほどだった。「これ②まで数限り
なく魚を殺してきたのだが、
こんな感情になったのは初め
てだ。」「この③魚をとらなければ、
本当の一人前の漁師にはなれ
ないのだ」と、太一は泣きそう
になりながら思う。
④「おとう、ここにおられたので
すか。また会いにきますから。」

第三次指導（感想　自分の生き方を考える）

第一時（感想文記述）

一　**文話**（作文を書く雰囲気作り）

①全文を朗読（学級担任）

②心に残っている言葉

二　**文題発表**（取材のヒントを共有）

③感想文の題名発表

三　**記述**

④原稿用紙一枚程度で書く。（二枚も可）

（一番、心に残っていることを

中心に書くとよい）

四　**自己批正**

⑤書き終わったら読み直して加除修正

五　**提出**

⑥書いた方が上になるように半分に折って出す。

＊状況を見て、労をねぎらいながら一人ひとり受けとる。

第二時（批正）

一　**総評**（全体の傾向を紹介する）

①　長所　（記述　内容）

②　記述上の欠点の指導（省略可）

二　**点呼**（個別作品紹介）五名程度

③　配慮児童を中心にしながら

三　**朗読**　三名程度

④　特徴的な感想文を中心に

（読後、簡単な話し合い）

四　**聴写**　一名

⑤　感想文の書き方のモデルになる作品を選んで聴写する。

（教師は、句読点を含め、改行も説明しながら読み、板書する。児童は、聞きながら書く）

五　**細評**　（聴写文をもとに話し合う）

⑥　作品のよさを記述面、内容面から検討し、次回の授業に生かす）

○　一人ひとりの作品を遡上にあげるのには、配慮が必要である。この作品を読んで、何か残るはずであるが、そこには個性が生まれる。今回は、十名程度の感想が紹介されたので、その感想と自分の感想とを比べているはずである。その程度の刺激でよいのだと考えている。

次の機会には、今回取り上げていない子を扱うようにすればよい。

感想文を書くということは、難しいものである。機会を与えて書き慣れさせることが、小学生にとって一番楽な方法である。そのためには、一度にいろいろとやり過ぎないことである。

とにかく、感想文（作文）は、自分を自分で観察して書けばよいのだと気付かせることである。

私の構想です。当日変更もあります。子ども達に家で音読をしておくように伝えてください。会うのが楽しみです。